

高橋真弓先生を偲んで

鈴木英文

NPO 法人静岡県自然史博物館ネットワークの元理事であり、静岡昆虫同好会の元会長、高橋真弓氏が昨年 11 月 10 日、老衰で急逝されました。9 月頃から博物館にお顔を見せなくなり、ご家族からは入院されたといひ、そのまま退院されることなくご逝去されました。

思えば、高橋先生との出会いは、私が中学 2 年生の時、当時安東本町のご自宅に伺った時が最初で、多くの蝶の標本箱に囲まれて、静かに蝶の話をされる先生に、私もこんな風になれたら、と尊敬の念を厚くしました。

先生を一言で言うなら、アマチュアを極めてプロに限りなく近づいた、日本の蝶類研究の第一人者でありました。

先生は高校 2 年の時に、富士山麓の田貫湖で行われた、野外観察会に参加し、その時の講師の杉本順一氏より、「植物の分布が富士川を境として東西に分かれているのには、歴史的な背景がある」との話を聞き、生物地理学を志すようになった、と伺いました。ここに高橋先生の原点があるように思います。

また先生は昔から「種とは何か？」という大きな疑問を抱いていたようで、1967 年「第一次静岡大学コロンビア・アンデス学術調査隊」で南米コロンビアのサンタ・マルタ山地の調査、1973 年「第一次奥アマゾン探検」で、コロンビアのアマゾン河上流の調査の 2 回の南米調査で、蝶の擬態とすみわけを目の当たりにし、種のあり方に深く感動したそうです。主な研究としては、南米から帰国後、それまでキマダラヒカゲとされていた蝶を、ヤマキマダラヒカゲとサトキマダラヒカゲの 2 種が混じったものだと整理されたことと、もう一つは、本土のヒメジャノメと沖縄のリユウキュウヒメジャノメを別種として分離したこと、の二つを挙げる事が出来ると思います。キマダラヒカゲは同所性の別種、ヒメジャノメは異所性の別種という二つのパターンを究



南米コロンビア調査当時の高橋先生

明されたと言えるでしょう。その他にも新種、新亜種の記載などもいくつかなされています。

また県内に分布するギフチョウ、ウスバシロチョウ、オオムラサキをはじめとする各種の蝶の分布調査に尽力し、その調査報告等は静岡昆虫同好会の「駿河の昆虫」や「ちゃつきりむし」に書かれたものだけで 1000 余編に及ぶほどです。中には大井川水源地方蝶類分布調査は 23 報まで出ていますし、毎年のように行っていたクロコノマチョウの分布調査など、継続して行われた貴重な報文が多く含まれます。

90 才になられても、オオムラサキ、スギタニルリシジミ、クロマダラソテツシジミなどの、現在減少している蝶、増えている蝶の現状を把握するため、野外分布調査を続けておられました。

先生が採集された膨大な蝶の標本は、先生が NPO 法人静岡県自然史博物館ネットワークの理事として、静岡県立自然史博物館設立運動に尽力し、実現された「ふじのくに地球環境史ミュージアム」に収められ、現在整理されております。

つつしんで、高橋真弓先生のご冥福をお祈りいたします。